

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	山根 亮一
主 論 文 題 名 : Cosmos and Cosmopolitanism: Vehicles for William Faulkner's American South (コスモスとコスモポリタニズム——ウィリアム・フォークナーのアメリカ南部)				
(内容の要旨) 20 世紀アメリカ文学史の中で、William Faulkner ほど地域主義を際立たせながら世界的に受容されてきた作品を書いた者はおそらくいないだろう。彼より一世代前の地域主義作家 Sherwood Anderson から、故郷であるアメリカ深南部はミシシッピを題材として小説を書くことを勧められた Faulkner は、その後その場所を、ないしはその歴史を、無尽蔵な美学的源泉だと認識した。1949 年にノーベル賞作家となった彼がその輝かしいキャリアを振り返る頃には、自らの作品群を「私の小宇宙 (“a cosmos of my own”)」と呼び、その中で彼が構築した虚構の共同体「ヨクナパトーフア群 (Yoknapatawpha County)」は、彼の地域主義を濃密に表現するための舞台となった。そして 1962 年に彼がこの世を去って半世紀が経つ間に、「小宇宙」は広範に伝播した。Jean-Paul Sartre にその才能を認められた Faulkner の表現形式は(米国やその他の国々で評判が高まるのは、フランスでの人気を介してのことである)、主に Gabriel José García Márquez、Édouard Glissant、そして Salman Rushdie らグローバル・サウスの作家たちに影響を及ぼしたことでよく知られている。 こうした Faulkner を 21 世紀的な視点から再構築するために、David Harvey の <i>Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom</i> (2009)が有効な補助線となろう。ここで David Harvey は、Immanuel Kant のコスモポリタニズムの基盤となる地理学と人類学に焦点をあてながら、ネオリベラリズム的なグローバル社会（又は、Harvey の言葉を借りれば、資本主義と帝国主義を含意するグローバル化という概念）に対する批判を展開した。その際、彼が参照したのは勿論 Kant だけではなく、Martha Nussbaum, Ulrich Beck, and David Held を経て、Boaventura de Sausa Santos が提唱する「サバルタン・コスモポリタニズム (subaltern cosmopolitanism)」にまで至る。全世界規模に渡る抑圧されたサバルタン、そのローカルでグローバルな声を増幅させることが自らの使命だと考える Harvey は、地理学的な知識こそがその重要な鍵になると考えた。本論文は、まさにこの視点に対しての文学的な回答となることを目指している。果たして、文学はどの様に、ネオリベラリズムに回収されやすい従来のコスモポリタニズムのキメラ的な性質を免れながら、尚且つ、Harvey の構築する地理学的コスモポリタニズムを				

補強することができるだろうか。こうした問いに取り組むために、Faulkner をめぐる全世界的な地域主義の系譜の中で、この論文は他の場所、他の作家との比較から始めたい。

それは、日本の中上健次に他ならない。とある講演で、彼がヨクナパトーフアの地図——それは 1936 年の小説、『アブサロム、アブサロム！ (*Absalom, Absalom!*)』で初めて地図化された——について、その図面上に広がる鉄道の直線に着目したことは、本論文の骨子を形成するための重要な着想を提供する。中上はその鉄道から拡散する様々な乗り物（馬車、自動車など）を想像し、それらを「繁茂する交通機関」と呼んだ。この表現は、ヨクナパトーフア地図上の鉄道が持つだろう共同体の形成機能を、Faulkner の好む文学的素材の一つであるスイカズラ（“honeysuckle”）の繁茂に喩えたものである。中上の述べる「繁茂する交通機関」は、まるで植物が繁茂するように増幅するキャラクター達の声を行い表し、結果的に「繁茂する南部」を幻視させる。その「繁茂」は、中上作品の主な題材である紀州の部落を美学化するための種子となった。Faulkner がヨクナパトーフア・サーガを創造したのに対し、日本では中上が「紀州サーガ」を創造したのである。

「繁茂する交通機関」が指し示すアメリカ南部人のポリフォニーは、おそらく中上本人が意識した以上のものを含意している。英語では、メタファーを構成する二つの要素を *tenor* と *vehicle* と呼ぶが（“Life is journey”という文の場合、*tenor* が“life”、*vehicle* が“journey”となる）、交通機関そのものに *vehicle* の役割を与え、Faulkner の描く南部人の声を代弁させたのは、中上が初めてだろう。そしてこのことは、コスモポリタニズムの言説において大きな効果をもたらす。何故なら、「地図上の交通機関＝小説内の人間の声」という仮説が成立するのであれば、前掲した Harvey の提唱する地理学的なコスモポリタニズムに対し、より動的な視点を付与することができるからである。Harvey は、グローバル社会に於けるデラシネ（根なし草）的な主体はネオリベリズムの育成条件だと述べた。この場合、「自由」はコロニアルな支配のレトリックとされる。しかしながら Harvey のこの対抗的な態度は、地域に根差した視点を優先するあまり、デラシネの不安定さを後景化させることで、彼本人が批判した Kant の差別主義に陥る可能性を孕んでいる。「適切な」地理学的知識なしでは、彼の目指すコスモポリタニズムは達成できないとする Harvey の態度は、Kant のそれと同じく、全ての人間がコスモポリタンな権利を有するとは限らない、ということを意味し得るはずだ。「適切な」という部分を詳述すれば、それは Newton、Descartes、Kant、Einstein、Gottfried Leibniz、Henri Lefebvre、そして Harvey 本人の地理学的概念を相対化させながら学ぶことでようやく得られる地理学的知識に連結される。とは言え、このような厳めしい面々

に囲まれてはじき出される解答が一体どれだけサバルタンの声と一致し得るのか、という点については疑問が残る（この7人の権威に迫られたら、サバルタンが余計に押し黙ってしまうに違いない）。その一方で、中上の示した「繁茂する交通機関」というメタファーは、それと共感関係にある者たちの声と併せて、ある地域に根差しながらも移動する主体の両価性を指し示す。この両価性を見つめることは、サバルタンの経験と寄り添いながら、Harveyのコスモポリタニズムを補充するための契機となるだろう。

文学に於いてデラシネとは必ずしも悪いことではない。ポストコロニアリズムの言説に於いては、Homi K. Bhabha が「散種するネイション (“DissemiNation”）」という鍵語を用いて、近代的な移民社会に於ける想像の共同体について述べている。とりわけ、彼のメタファーについての概念はこの論文にとって示唆的である。metaphor の語源である「移動(“transfer”）」に着目した Bhabha は、移民たちにとって失われた故郷という空白を埋めるために「ネイション」が在るのだと考えた。それ故「ネイション」は散種するのである——文字通り、地理的にも時間的にも遠い過去を、想像の共同体として表出させながら。「想像の共同体」とは元々 Benedict Anderson の用いた言葉であるが、それが内包するナショナリズム的なニュアンスから距離を取るために、Bhabha は (Anderson がそうした様に) 印刷資本主義の構造ではなく、メタファーの持つ移動の概念に注目したのである。Bhabha が示す想像の共同体、「散種するネイション」は、様々な点で中上の「繁茂する南部」と相性が良い。何故なら、第一に、それらの空間はメタファーの産物であるという認識を強調しているから、次に、それらの空間に於いて定住と移動という両価性を表現しているから、そして最後に、その空間に付与された可動性故に、世界的な視野を提供しているからである。文学的言語とは、本質的に「移動（または隠喩）」するものなのであれば、それは、我々に地域に根差しながらも世界市民的な存在であることを認識させようとする地理学的コスモポリタニズムにとって、必要不可欠な過程を照射するだろう——「ローカル」が「グローバル」になるまでの過程を。

本論文は、中上の「繁茂する交通機関」というメタファー、そして Bhabha の「散種するネイション」という概念から着想を得て、Faulkner の地域主義を世界市民的視野から見つめなおす。換言すれば、それは彼の「コスモス」を「コスモポリタニズム」と接続する試みである。その際に、とりわけ Bhabha、Paul Giles、そして Jonathan Arac 達が提供するポストコロニアリズムの視点は、深南部に於ける Faulkner の語り手としての主体位置を再考するのに有効になる。彼らの学術的達成は、Faulkner の地域主義作家としての立場をより広範な視野から捉えなおすための重要な視座を設定する。そこから見直される「繁茂する交通機関」——彼の小説内に於ける馬車、鉄道、自動車、飛

行機と登場人物との関わり——は、この作家のデラシネ的な地域主義、または、彼の描くアメリカ南部が内包する定住と移動、またはローカルとグローバルなものの両価性を紐解いていくための文学的装置となる。

勿論、この議論の中では **Faulkner** のみを射程に入れる訳ではない。**Gertrude Stein**、**T.S. Eliot**、**F. Scot Fitzgerald** 等のモダニスト、そして **Thomas Dixon Jr.** や **Flannery O'Connor** 等のアメリカ南部の地域主義的な作家群にも言及する。が、それでも **Faulkner** に焦点を絞る理由は、本論文が——例えば **Hugh Kenner** が、**Eliot** や **Faulkner** を含むアメリカン・モダニストの作品に見られるヨーロッパ芸術の影響、またはそれらの間テクスト性から「地元生産式コスモポリタニズム(homemade cosmopolitanism)」を見出したように——新たなコスモポリタニズムの総体を発掘することに関心が無いからである。別の言い方をすれば、**Harvey** が地理学に根差した形で整理しなくてはならない程、もはや地に足の着かなくなった（既に種々雑多に存在する）コスモポリタニズム「ズ」を更に多様化するよりも重要なことが他にある、と信じるからである。そのことが、様々な作家の別々の世界観ではなく、一人の作家が提供する世界観における内的差異、その両価性に惹かれる理由を説明する。

「そのこと」とは、文学そのものの一機能と関連するのだが、「ローカル」と「グローバル」とを架橋しながら、その融合を遅延させることに他ならない。又は、この二つの相反する空間的概念を混在させることの結果ではなく、その過程を強調すること、とも言えるだろう。一見曖昧に見えるこの態度は、1995年の「フォークナーとヨクナパターファ学会(**Faulkner and Yoknapatawpha**)」に於いて、**Sacvan Bercovitch** が述べたこと——ある学術領域が指し示す包括的な回答に対して、固有の物語を通じて疑いを差し挟むことが文学の役割であるという提言——によって支持されるだろう。彼が述べる様に、文学とは絶えず既存の知識体系の再考を誘うのであれば、あらゆるものが「デラシネ」に思えてくる。例えば、それが個々人の主体位置やアイデンティティーであってても。**Tobin Siebers** がアメリカのアイデンティティー政治の繁栄は、同国の文化がナルシストの文化であることの証左であると述べたとき、人種、性差、階級といった文化政治における「三種の神器」は脱神話化された。その代わり鮮明になったものは、**Walter Benn Michaels** が述べた様な、言語を通じてアイデンティティーを物象化したいという自己充足不可能な欲望である。

ここで、**Michaels** が **Faulkner** の『響きと怒り(*The Sound and the Fury*)』(1929)のその議論の端緒とし、多民族化した1920年代アメリカのモダニズムに内在するネイティブイズムの欲望を指摘したことは注目に値する。**Harvey** にとっては、コスモポリタニズムの言説を地理学的に補強すること、世界市民主義が地域主義と融合することは彼の

反ネオリベラリズムにとっての正義なのであるが、**Michaels** が提供した文学的視点から言えば、それは自らの存在を地域に根差したいというネイティビズムの欲望と隣り合わせなのである。もっと言えば、その欲望は、奴隷制時代のアメリカ旧南部を夢想する **Faulkner** 作品に於いては、人種主義を引き起こす要素にもなる。この点から見ても文学にとって、地域に根差さないデラシネであるということは必ずしも悪いことではない。**Faulkner** は、アメリカ南部の地域主義が正当化する人種主義と、その人種主義を否定する普遍的な人道主義を、和解させずにそのまま緊張関係に置きながら提示している。端的に言えば、「ローカル」と「グローバル」を敢えて矛盾した形で並列させるのだ。この矛盾こそが、もしそうしたものをここで定義して差し支えないのだとすれば、**Faulkner** 作品の示す文学的な正義と言ってよい。

ここで言うデラシネとは、単にネオリベラリズムが示す他者抑圧的な自由主義のエージェントではなく、世界市民的な想像の共同体を形成するためのメタファーの機能を示す。再び **Bhabha** の議論に言及すれば、失われた故郷を埋め合わせるものがメタファーとしての「ネイション」なのであるが、**Faulkner** にとってそれはアメリカ旧南部の記憶と不可分だ。しかし彼の場合、その地域についての説明を登場人物の誰かの言述に託してしまえば、**Michaels** がそうした様に、その言葉は人種差別的なネイティビズムの欲望に直結させられてしまう。そうでなければ、せいぜいのところ、その登場人物が属する特定のアイデンティティ・グループの政治的な (**Siebers** にとってはナルシストな) 企図に貢献するに留まらざるを得ない。

しかしその一方で、メタファーにその言葉を託すのであれば、そのデラシネ的な性質故に、ネイティビズムの欲望から解放され、彼の地域主義はより普遍的な視点から再考されるかもしれない——メタファーが、「ローカル」と「グローバル」との間を移動しながら。そして中上がおそらく直感的に表現した様に、そのメタファーの機能は **Faulkner** の描く「繁茂する交通機関」によって具現化されている。これから提示する五つの小説は、それぞれの仕方で、作品内の様々な交通機関とその乗組員（又はそれを描写する登場人物）たちの共振関係を例証する。ここでは、乗り物によって様々な主体位置にある登場人物の声が代弁されている。彼の「コスモス」における輸送メディアと言語メディアの同化、又は、交通機関とメタファーとしての多義的な **vehicle** に注目することは、**Faulkner** の地域主義を内部から脱構築しながら、結果として、彼の「コスモポリタニズム」を照射することに繋がるだろう。

Faulkner 自身が、*Yoknapatawpha saga* の始まりは *Sartoris* (1929) という小説からであると定義したこと、そしてその架空の共同体が *Absalom, Absalom!* において地図化されたことが、この論文の射程を決定する。各章はこの期間の時系列を元に構成され

ている。*Sartoris*（これは編集されたヴァージョンであり、*Fragments in the Dust*という原文は70年代に死後出版された）、*The Sound and the Fury* (1929)、*Light in August* (1932)、*Pylon* (1935)、そして *Absalom, Absalom!* (1936) について議論する5つの章は、どの様に Faulkner が地域主義的視野からコスモポリタンな視野を構築していったかを追跡している。端的に言えば、世代間や兄弟間を繋げる血族的な共同体（*Sartoris*, *The Sound and the Fury*）から始まり、深南部という人種主義的な地域の共同体（*Light in August*）と、反対に地域性の曖昧化されたニュー・オーリーズを舞台とした共同体（*Pylon*）を介して、最終的には奴隷貿易の記憶を通じて広がる全世界的な共同体（*Absalom*）へと繋がっていく。これらの物語に於ける登場人物たちは、交通機関という共通分母を介して、それぞれ自意識的な共同体概念を示しながらも、総じて、それらの概念の不完全性と共に他者への意識を表現している。

以上、本論文はヨクナパトーフアの生成からその地図作成に至るまでの5つの小説を取り扱うが、この構成から止むを得ず排除してしまった作品——例えば1930年の『死の床に横たわりて (*As I Lay Dying*)』や『サンクチュアリ (*Sanctuary*)』など——も忘れてはならないだろう。しかしそれらについては、本論文の焦点、つまり、*Absalom* に付随する Yoknapatawpha 地図を見て中上が幻視した「繁茂する交通機関」が、それらの排除をいくらか正当化するはずだ。様々な交通機関を提示する5つの小説は、お互いの欠落を補い合いながら、Faulkner が「コスモス」と呼んだアメリカ南部と、その場所に内在するコスモポリタニズムの可能性を示している。彼の「コスモス」とはつまり、「ローカル」と「グローバル」とを両面的に表現し、同時にデラシネ的な人間の存在不安を喚起させる物語形式でもある。家族や地域について描きながらも、それらが世界的な奴隷貿易の記憶と不可分なアメリカ深南部に根差す以上、その地域的枠組みから逸脱せざるを得ない Faulkner の語り手としての主体位置——その分裂が、これら5つの作品群によって段階的に示されている。そしてその分裂した自意識ゆえに、地域から世界を、世界から地域を見つめ直すために常に移動する主体位置が生成されているのである。